

# Donne の First & Second Anniversaries 論 ( I )

## AN ANATOMY OF AN ANATOMY OF THE WORLD — 中世への絶望と近代への懐疑のマニエリスム —

岡村真紀子

### I

1610年、Elizabeth Drury という一人の少女が亡くなった。ときに14歳であった。詩人 John Donne は彼女に funeral elegy を捧げたが、彼はこの少女のことは少しも知らなかった。当時 Donne は、秘密結婚した妻 Anne と次々に生まれた病弱な子どもたちを抱え、貧困のどん底にあえいでいた。Anne との結婚により1度は手にした宮廷での職も失い、Catholicism と Anglicanism の間での葛藤に苦しみ、聖職にもつけないでいた頃のことだった。どうやら Donne が elegy を Elizabeth に捧げたのはお金のためであったらしい。おかげで Donne は Elizabeth の父 Sir. Robert Drury と急速に親交を深め、1612年には夫婦と共に外遊までしている。旅立つ前に、*The first Anniversary* を匿名で出版したが、Donne は毎年 'Anniversary' を彼女に捧げる、というより世に問うつもりであったらしい。

And, blessed maid,  
Of whom is meant what ever hath been said,  
Or shall be spoken well by any tongue,  
Whose name refines course lines, and makes prose song,  
Accept this tribute, and his first yeares rent,  
Who till his darke short tapers end be spent,  
As oft as thy feast sees this widowed earth,  
Will yearely celebrate thy second birth,  
That is, thy death;

(*The first Anniversary 'An Anatomy of the World'*, ll. 443-451)<sup>1)</sup>

(この作品については、以下行数のみ表記する。)

Sir. Roger Drury の持ち家を借り受けて住み始めた Donne にとってはまさに 'rent' (家賃) であったのかもしれないが、1年1年書いていくつもりであった1作目をものした (つまり年貢を

1年分収めた) という意味でもあったのかもしれない<sup>2)</sup>。しかし実際には Anniversary は2作しか発表されなかった。尤もその名とは異なり、少女の死から1年目、2年目に書かれたのではなく、ほぼ1年のうちに2作が発表されていたのではあったが……。これらの作品は、前述したように匿名で出版された。匿名とはいえ、Donne が生前自らの手で世に問うたのはこの2作だけであったことを思えば、この作品は発表することに意味があった。つまり Elizabeth への、というよりも父親 Sir. Drury への elegy (慰めのうた) であり、その報酬を目当てにしたものであったということが分かる。しかしこれらの作品は芳しい評判を得なかったようである。

…… Of my Anniversaries, the fault that I acknowledge in my self, is to have descended to print any thing in verse, which though it have excuse even in our times, by men who professe, and practise much gravitie; yet I confesse I wonder how I declinde to it, and do not pardon my self; But for the other part of the imputation of having said too much, my defence is, that my purpose was to say as well as I could: for since I never saw the Gentlewoman, I cannot be understood to have bound my self to have spoken just truths, but I would not be thought to have gone about to praise her, or any other in rime; except I took such a person, as might be capable of all that I could say. If any of those Ladies think that Mistris *Drewry* was not so, let that Lady make her self fit for all those praises in the book, and they shall be hers.

(A Letter to George Gerrard, 1612)<sup>3)</sup>

I hear from England of many censures of my book, of Mrs. Drury; if any of those censures do but pardon me my descent in Printing any thing in verse, (which if thy do, they are more charitable then my self; for I do not pardon my self, but confesse that I did it against my conscience, that is, against my own opinon, that I should not have done so) I doubt not but they will soon give over that other part of that indictment, which is that I have said so much; for no body can imagine, that I who never saw her, could have any other purpose in that, than that when I had received so very good testimony of her worthinesse, and was gone down to print verses, it became me to say, not what I was sure was just truth, but the best that I could conceive; for that had been a new weaknesse in me, to have praised any body in printed verses, that had not been capable of the best praise that I could give.

(A Letter to Goodyer, 1612)<sup>4)</sup>

## II

同時代人の Jonson をはじめとして、19世紀の Spence や Cunnigham, Dowden, Bradford,

Gosse, 20 世紀になってからは Chadwick, Sanders, Praz, Porter などが Donne の作品の中で、2 つの Anniversaries は失敗作だとしている。elegy でありながら、Elizabeth に対する真摯な思いに欠け、悲しみが少しも伝わってこない、よそよそしく大袈裟な表現に満ちあふれ、自らの詩表現に酔ってでもいるかのようで、elegy としては不適當ですらあるというものだ。また、不遜で不敬な表現だともいう<sup>5)</sup>。しかし一方では 19 世紀の Swinburn, Furst, Saintsbury, Schelling, Leishman などがこの作品を、類稀な力強さと深さをもったものとし絶讃している。Gosse らと同じように、Elizabeth への追悼の思いは稀薄だとしながらも、だからこそ歌われた世界の深さと広がり、その言葉の豊かさ、崇高さ、音楽性を指摘している<sup>6)</sup>。前にも述べたように、2 つの Anniversaries は明らかに一人の少女への哀歌ではなかった。Donne は Sir. Drury のためにこれらの詩を書き、その中に彼自身の抱いていた思いや思想を、彼の求める詩表現で表した。美的で、真摯であって、おかしい、気まぐれですらある。想像力を駆使し、思索に耽る。いかにも世俗的な Donne が、荘厳なまでに宗教的な詩をものしているのである。その二律背反が、ことばの緊張を生み、強く心に響く調べをかもし出す。不協和音の協和音すら生み出して効果的なのである。例えば Swinburn や Furst のいうように。

What a magnificent and enthralling poem! how overflowing with glories of thought and word like a phosphoric sea by night with crossing and breaking flames, and how rich in deep grave harmonies of splendid and sonorous sadness! How did he for once learn such music, and then return to his habitual discords 'like the sow that is washed to her wallowing in the mire'?

(a letter to Theodore Watts-Dunton, 1876)<sup>7)</sup>

Furst remarks on the crowded, incongruous quality, the mix of "the beautiful and humorous," the presence of such diverse elements as satire, references to the new science, and figures lacking good taste. For Furst, the very force of the "imaginative, daring, and fantastic figures" detracts from the main theme of the poems and obscures the "train of speculative thought" running throughout. Yet, he also notes that one striking characteristic of the poems is Donne's "restraint" in portraying briefly and vividly what another author would have made "weak and ineffective" by extension and elaboration.<sup>8)</sup>

このように、Anniversaris に対して高い評価を与えるにせよ、そうでないにせよ、どの批評家も Donne が心から少女の死を悼み、悲しんでこの作品を書いたとはしていない。

しかし次の詩行はどうだろう。

She to whom this world must it selfe refer,  
As Suburbs, or the Microcosme of her,  
Shee, shee is dead; shee's dead: when thou knowsts this,  
Thou knowst how lame a cripple this world is. (ll. 235-238)

こんなにまで Donne を悲しませている「彼女の死」とは何なのだろうか。このことについても、今までの批評家たちは様々なことを言ってきた。理想的な女性像への哀歌、キリスト教の教義の崩壊や自然観の崩壊、また知性の分裂への悲しみ、聖母マリアへの挽歌、はたまたエリザベス女王への追悼歌等々<sup>9)</sup>。本論文では改めてこのことを考えてみることにする。

### III

*The first Anniversary* はなんとも暗い詩である。elegy であるのだから、といえばそれまでだが、それだけではない。前節で述べてきたように、Donne は Elizabeth の死をこれほど、読む者をすらやりきれない思いにさせるほど悲しんでいるわけではない。しかし、この詩全体は、得もいえない陰鬱さにおおわれている。*The first Anniversary* には次のようにタイトルがつけられている。

AN  
ANATOMIE  
OF THE WORLD.

Wherein,  
By occasion of the untimely death of  
Mistris Elizabeth Drury,  
the frailty and the decay of this  
whole World is represented.

anatomy (解剖) は科学的な手法である。医学の世界で事実を知るために使われるようになった方法であるが、それを Donne はここで使っている。the World (世界、この世、あるべき世界)を知るために、科学的に観察しようというのである。事実を観察し、認識、理解し、考察を重ねて結論を導き出す、というのは近代的な科学の方法論であった。だが Donne が今、ここでその方法を取り入れるのは、彼の近代科学への嗜好を表しているともみるのは短絡的にすぎるであろう。Donne が the world の実際を確かめてみたいと思ったのは、Mistris Elizabeth Drury の *untimely death* (時ならぬ死)があったからである。あるはずがないと思われた死——これこそが Donne の心を動かし、この詩を書かせたと思われる。予期しなかった死を目のあたりにしたとき、this whole World (この世の全て)がいかに脆く、崩壊を迎えているかが明らかになっ

たのである。

世界はすっかり死んでしまった。

Well dy'd the World, that we might live to see

This world of wit, in his Anatomie;

(‘To the praise of the dead, and the Anatomie’, ll. 1-2)

人が生きる世界とは、知性の世であって、それを楽しむために人はこの世界を生きている。まずここに Donne の世界観——人の生きる世に対する世界観がある。だから、世界の核である Soule (それが ‘彼女’ なのであるが) が亡くなってしまうと、そこに住む人さえもその存在が危うくなる。

‘An Anatomy of the World’ のはじまりにおいて Donne は、彼女の死によりいかに世界が存  
在意義をなくしてしまったかを、激しい陰鬱さで語っている。‘great earthquake’, ‘languished’,  
‘a common bath of tears’, ‘bled’, ‘consumption’, ‘fever’, ‘fits’, ‘agues’, ‘Lethargie’,  
‘wound’, ‘misery’——20 行ほどの間にこういった語がちりばめられ、激しさの果てに sense  
(感覚) も memory (記憶) もなくし、speechless な (ことばをなくした) 沈黙の世界が荒涼  
と広がってくる。彼女は地球の核ゆえに。その死は、核がくずれる大地震であり、世界を揺るが  
し、根こそぎこの世の力を奪ってしまう。核のない地球——この虚無感は、最初は激しい症状を  
みせる。しかし、それもおさまってみると、核を失ったという傷も病も忘れていく。これほど怖  
いことはないであろう。この世は soul (魂) をなくし、wit (知性) を失い、無気力に無感覚に  
なっていく。亡くしたことさえ認識できない。まして亡くした痛みなど感じるはずもない。

Her death did wound and tame thee than, and than  
Thou might'st have better spar'd the Sunne, or Man.  
That wound was deep, but 'tis more misery,  
That thou hast lost thy sense and memory.  
'Twas heavy then to heare thy voyce of mone,  
But this is worse, that thou art speechless growne.

(ll. 25-30)

病み疲れた世界では時の運行さえ乱れてくる。

but being dead,  
Measures of times are all determined

(ll. 39-40)

太陽が中心の世界（地動説をとる近代）であれ、人が中心の世界（天動説をとる中世）であれ、どちらももはや意味がない (l. 26)。地球の存在そのものに意味がない。科学的認識がどんなに発達しても、この世の病に不感症になってはなんにもならない。太陽などないほうがまし、まして人など存在しないほうがましだなどと、これほどのメランコリーがあるだろうか。時が流れ、時代が流れて世界は広がり、近代へと乗り出しても、それがいつも世界の進展とは限らない。ここで、世界の核である彼女が *Queene* と呼ばれると、たちまち読む者に 10 年足らず前に世を去った *Sir. Drury* の娘と同名の *Elizabeth* 女王を思い起こさせる。とすると、*the present Prince* は *James* 王ということになるが、もはや世界は死滅しているのだから、王も死んでいるも同然。王が変わろうと、王家が変わって *Stuart* 王朝になろうと、そんなことで何も蘇りはしない。もうずっと世界は死んだままなのに何が死んだのかは誰にも分からない (ll. 41-42)。‘*But long she’ath beene away, long, long*’ (l. 41), ‘*sh’was dead*’ (l. 51), ‘*the Soule being gone, the losse deplore*’ (l. 54), ‘*it be too late to succour thee.*’ (l. 55), ‘*shee …… / Can never be renew’d*’ (l. 58) とたたみかけ、‘*thou (=Sicke World) never live*’ (l. 58) と、悲しみと絶望が頂点に達したところで *Donne* は訣然という

I (since no man can make thee live) will try,  
What wee may gaine by thy Anatomy.

(ll. 59-60)

*Donne* 自身が続いているように、彼女が死んだことにより、人はこの世がその核において崩れ、永遠の命をなくしたことを知った。それはあまりにも高価な代償であった。しかし、もう一度 *anatomy* を施すことにより蘇生させようというのだから、ここでの *Donne* には近代科学への信頼がある。

さて、解剖することに意を決したあとの詩は、急にその緊張と陰鬱さが緩和し、先ほどまでの *Donne* 特有の *all or nothing* 的な思考は影をひそめる。彼女自身はいなくなっても *Her Ghost* (彼女の霊) が現れ、燦然たる光でなくても *a glimmery light* (かすかな光) がさす。この世の魂も知性も消え果てたとはいえ ‘*A faint weake love of vertue, and of good* (かすかな知性と悟性への思い) は残り、*the twilight of her memory*’ (彼女へのはるかな記憶) が残る、と僅かな望みに光を灯す (ll. 67-74)。この世は、感覚も記憶もなくしたのだ、とペシミスティックにうたっていた *Donne* の自己矛盾。が、この自己矛盾こそが最も *Donne* らしいともいえる。自己の内部にアンビヴァランスを潜ませながら世の中の矛盾を暴いていくパラドックスこそが。

#### IV

‘*Let no man say, the world it selfe being dead*’, (l. 63) と思い直し *anatomy* を実行した *Donne* は約 100 行後、‘*And (thou) learn’st thus much by our Anatomie*’ (l. 185) といってい

る。世界を解剖し、知ったことは何だろうか。彼女が死んだとき、崩壊し、死を迎えた世界は彼女の記憶を核として生まれ変わる。

Which, from the carcasse of the old world, free,  
Creates a new world, and new creatures bee  
Produc'd:

(ll. 75-77)

Donne は the old world と the new world を解剖し続ける。the old world には幾多の危うさ (dangers) があり病い (diseases) があつた。そこに生きた人はそもそも不完全な存在だった。崩壊を内に秘めた (ruinous) 存在だった (l. 95)。頭からさかさに産まれるところに象徴されるように、この世に生まれ落ちるときから、墮落を予想させる存在だった (fall upon / An ominous precipitation) (l. 97-8)。Donne は人間存在そのものに懐疑を抱いているようである。とはいえ、この人間存在の零落は女性のもたらした原罪にあるという。男性 (人類) の安らぎのために創られた女性が、神の大いなる意図に反し、人類に頽廃をもたらしたとするのは、もちろん新約聖書の *Genesis* に基づくものではあるが、そこから人類の最初の婚姻が人類の葬儀であり、原罪を犯して以来、人類が子孫を残してきた営みが人類を抹殺する営みに他ならなかったとするのは Donne 特有のペシミズム — 人間存在の否定である。An *Anatotomy of the World* が女性の理想を描写しつつ、その女性の喪失の痛みを歌うものであることを考えると、この辺りの詩行は女性蔑視がベースになっていておかしい、という説もいくつかある<sup>10)</sup>。が、Donne の意識にあるのは女性ではなく人間である。

‘mankind’, ‘men’ が様々なコンテキストで使われ Donne が人間とは何かを模索しているのがよく分かる。詩行の中に出てくるように、‘She’, ‘Woman’ は ‘vertue’<sup>11)</sup> を意味するのであって「女性」を意味しているのではない。原罪を犯した人間 — それはもともと犯すべく創られたものなのである。キリスト教の教義の中では、その人間の罪と不完全さは Christ により贖われ、補完されるが、Donne にとって人間がそういう不完全な罪多き存在であることには変わりはない。Garden of Eden では女性 Eve が誘惑に負けて墮落したとはいえ、もともと Garden に Eve を誘惑する Serpent がいた。神の目的に反して人は墮ちたとはいうが、もともと人の墮落は神の創造の計画の中に入っていたのであるから。とはいえ、キリスト教の思想が全き形で文化を支えていた中世は良かった。今やキリスト教が揺らぎ Catholicism と Anglicanism そして Puritanism との間に人々が揺らぐ。宗教のありようも、その教義も、Donne が全心挙げて信ずるに足るものではない。彼女の死、世界の死はひとつにはキリスト教の崩壊であり、それはとりもなおさず、中性の精神体系の崩壊であつた。死んでいった the old world (中世) に対して the new world (ルネサンス — 近代) の Paradise には悪の要素はない。純粋な世界なのである。他から悪 (serpent) の入って来る要素はあるのではあるが (ll. 81-84)。そんな the new world

に生きる new creatures たる当時の現代人は、中世のキリスト教世界での人間とは違う。

And yet we do not that; we are not men:

There is not now that mankinde,

(ll. 111-112)

中世は神中心の世界観であった。地球中心の宇宙観であった。果たしてそれが正しかったのか。それとも太陽が中心の新しい世界での宇宙観が正しいのか。星の運行の乱れた時代があった (l. 117)。時の運行が正しくたてなおされた今がある。しかし、この時の刻みが正しいのか否か (l. 130)。the old world の世界観、宇宙観にかわる the new world の世界観、宇宙観にも正しいという確証はない。観察する (observe) という新しい科学的方法をもってしても、それを知るのには人間の能力を超える。過去 (中世) は悲しむべき時代であった。今 (ルネサンス-近代) はまだ信じられない (ll. 131-132)。おまけに人の一生は短い、人は卑小なものだ。

So short is life, that every peasant strives,

In a torne house, or field, to have three lives.

And as in lasting, so in length is man

Contracted to an inch, who was a spanne;

(ll. 133-136)

この世界はそもそもの出発点から不完全で荒廃したものであった、という絶対的なペシミズムがこの詩の基調である。神が創造を誤ったとするのではなく、神の創造の完成をさえ阻む崩壊があったとする。全き神の意志があれば世界は美しいのだとするところに一筋の光を残しているものの、神の意志の発現を阻むものの存在をこの世界に観てしまうところが Donne の世界である。歪んできてしまった世界——frame が歪んでいては、世界の最もすばらしい存在であるはずの人間も歪む。だが人間はすぐれた存在だから、世界の崩壊をまず感じるのも人間である。それが人間のすばらしさなのだ。

Shee, shee is dead; shee's dead: when thou knowest this,

Thou knowest how poore a trifling thing man is.

And learn'st thus much by our Anatomie,

The heart being perish'd, no part can be free.

And that except thou feed (not banquet) on

The supernaturall food, Religion,

Thy better Growth growes withered, and scant;



Donne の First & Second Anniversaries 論 (I)

Be more then man, or thou'rt lesse then an Ant.  
Then, as mankinde, so is the worlds whole frame  
Quite out of joynt, almost created lame:  
For, before God had made up all the rest,  
Corruption entred, and deprav'd the best:

• • •

Both beasts and plants, curst in the curse of man.

(ll. 183-194 …… 200)

これが the old world、人間の世界の崩壊の過程であり、解剖の結果分かったことである。世界の不完全さは 'lame' と表現されている。再度同じことばがくり返される。

She to whom this world must it selfe refer,  
As Suburbs, or the Microcosme of her,

(ll. 235-236)

'She' が世界の本質であり、世界は彼女の小宇宙 (microcosm) なのだから。人間が世界の microcosm だとする Donne の世界と考え合わせると<sup>12)</sup>三重構造になっている。太陽が中心であれ、地球が中心であれ、同心円の世界がさらに同心円的な構造になっているのだ。全て規範になるはずの 'She' が死んでは、その microcosm たる世界も、更にその microcosm たる人間も 'lame' になり 'cripple' になる。世界の完全さは美 (beauty) である。その美は色 (colour) であり、調和 (proportion) なのである。瓦解した世界の更なる解剖はいかにこの proportion がくずれたかを示す。世界の構成要素の一部ではなく、その本質での崩壊は同心円構造の proportion の乱れであり、宇宙の軌道の円がいびつになってくる。中世には完全を表すものと考えられていた円や球は、ある 1 点から等距離の点の軌跡である。宇宙 (世界) の軌道が完全な円を描く限り世界の調和は保たれ、その点はくずれない。が、今の軌道は円ではなくなり、太陽、世界の軌道はずれてくる。

For his course is not round; nor can the Sunne  
Perfit a Circle, or maintaine his way  
One inch direct;

(ll. 268-270)

So, of the Starres which boast that they doe runne  
In Circle still, none ends where he begun.

(ll. 275-276)

つまり ‘All their proportion lame’ (l. 277), だとすると地球も危ない。‘keeps the earth her round proportion still?’ (l. 285)。月も然り。‘The floating Moone would shipwrecke there, and sinke?’ (l. 288) そして ‘The worlds proportion disfigured is’ (l. 302), ‘beauties best, proportion, is dead,’ (l. 306)。*‘even greif it selfe, which now alone / Is left us, is without proportion’* (ll. 307-308) というように proportion あってはじめて神の意志が発揮される中世の世界なのであれば, その proportion が崩れるとたちまち崩壊してしまう。その proportion を決めていたのが ‘She’ だったのである。

Shee by whose lines proportion should bee  
 Examin'd, measure of all Symmetree,  
 Whom had that Ancient seen, who thought soules made  
 Of Harmony, he would at next have said  
 That Harmony was shee, and thence inter,  
 That soules were but Resultances from her,  
 And did from her into our bodies goe,  
 As to our eyes, the formes from objects flow:  
 Shee, who if those great Doctors truly said  
 That the Arke to mans proportions was made,  
 Had been a type for that, as that migfht be  
 A type of her in this, that contrary  
 Both Elements, and Passions liv'd at peace  
 In her, who caus'd all Civill war to cease.

(ll. 309-322)

中世の世界の proportion は ‘harmony’ で成り立つ。各天体の運行の harmony, 天と人との harmony など……。世界を構成する諸元素も, 世界を支配するいかなる思想も調和を保ってられる harmony — これこそが世界の soul (魂) たる彼女であることがここで分かる。一方, イギリス社会の均衡を保ち, 極端なピューリタンとカトリックの恐怖政治の和合を図り, 国民に平和をもたらした Elizabeth 女王への讃辞も, ‘that contrary / Both Elements and Passions liv'd at peace / In her who caus'd all Civill war to cease,’ の3行には潜んでいる。

Donne が仕えた Elizabeth I の時代は, イギリスのルネサンスといわれる時代であった。うちつつく戦乱の中世を統一した祖父 Henry VII の開いた Tudor 王朝をうけつぎ, 父 Henry VIII の Roman Catholicism との確執をもたらした再度の混乱を治めた Elizabeth 女王の時代はイギリスにとっては, 世界に進出し, 商業を盛んにし, Spenser や Shakespeare 又 Percel を輩出した時代であった。もともとルネサンスはイタリアで花開いた芸術の様式の1つであったが, その規

## Donne の First & Second Anniversaries 論 (I)

範の中心が proportion (均衡) であったことを思えば 'She' が死んで崩壊していったのは、ただ中世だけでなく、中世を経て迎えたはずの新しい時代もそうだったのではないだろうか。そう考えてくると Donne の世界の解剖は the old world の腐廃をどんどん暴きつつ the new world をも解剖していく。Pigmie 族の住むアフリカや (ll. 142-3), 香料や銀の東方, また西インド諸島の発見 (ll. 230, 233), あたらしい思想の誕生 (ll. 160, 205) など。が, new Physick (新科学) を worse Engine (劣悪機関) と呼び, new Phylosophy (新思想) が懐疑に包まれているとし, new world の解剖の結果にも必ずしも光明をみているわけではないことも分かる。

And new Philosophy calls all in doubt,  
The Element of fire is quite put out;  
The Sun is lost, and th'earth, and no mans wit  
Can well direct him where to looke for it.

(ll. 205-208)

中世の世界を構成する四元素のうち, fire (火) は最も上位の元素で, 神の国から quintessence 圏に伝わった神の意志が this world (この世) で一番先に伝わるのがこの fire であった。けれどもその fire が消えてしまった。新思想が生まれることは中世の思想がその根本から崩壊することでもありながら, それに代わるものは見いだせない。4つの元素で成り立つ地球を中心に, その周りに第5元素で成り立つ層があり, 月, 太陽, 惑星の軌道, 恒星天, と同心円の層をなす中世の宇宙観が壊れ, 地球がどこへ行ったのか分からない。人間の知力でもってでは考え及ばない宇宙の姿なのだ。

また, 新世界の発見も, どんなに世界がに拡大したとしても, イギリスがその世界を広げていったとしても, 所詮 'She' の周辺部 (Suberbs) にすぎないぐらいの意味しかもたない, とまで言う (ll. 235-236)。まさに, new world は全て懐疑に包まれている。彼女の死によって崩れ果てた社会を純化し, 蘇生させるには a true religeous Alchemie (真に敬虔なる錬金術) によるのだと, 否定したはずの中世の技術を持ち出しさえするのだから, Donne は決して中世に訣別して近代へと向かっているわけではない。ここでは, 中世と近代は, 全く別のものというわけではなく, 相反するものでもなく, 連続するものなのである。

## V

まだ医学技術のそれほど進んでいないこの時代において解剖は難しい技術であった。1つ1つ手順を追っていても時間の経過のうちに死体は腐敗していくからだ。それと同じように世界もただ解剖しているだけでは, きちんと1つ1つすればするほど腐敗が進んでいく。それは止めようもない (ll. 435-440)。

…… thy second birth

That is, thy death; for though the soule of man  
Be got when man is made, 'tis borne but than  
When man doth die; our body's as the wombe,  
And, as a Mid-wife, death directs it home.

(ll. 450-454)

肉体 (body) の死んだ世界はどんどん腐敗していくほかないが、肉体の死とともに魂 (soul) が生まれる。肉体が誕生するとき、魂は身ごもられ、肉体の死とともに生まれる。いわば、肉体は魂を懐妊する子宮であり、全き生を得るのを助ける産婆である。詩人は、'She' がいなくなって連れ合いを亡くして虚しい生を生きることになった '世界' のために毎年毎年 rent<sup>13)</sup> として elegy を捧げようという。この世から virtue がなくなり、沈鬱な世界になればこそ。その中で elegy を捧げ、世界の肉体の死を悲しむとともにその魂の再生を讃えて歌おう、と。あの 'A nocturnalle upon S. Lucies day' を書いた Donne のメランコリーがこの詩を覆っている<sup>14)</sup>。どんな詩行も 'She' がいれば、そして virtue があり、harmony があれば美しい詩行となる (l. 446)。だが 'She' の肉体は死んで墓に横たわり、魂は神の国にある。人にできるのは、詩に歌うことにより 'She' の名声を、その価値を永遠に残すことである。宇宙に harmony があるとき美しい heavenly music が奏でられるという。そんな神の御業ともいふべき調和の音楽を奏でることにより、世界を崩壊と腐敗から蘇生させようという Donne の決意でこの詩は終わる。

Vouchsafe to call to minde that God did make  
A last, and lasting'st peece, a song. He spake  
To *Moses* to deliver unto all,  
That song, because hee knew they would let fall  
The Law, the Prophets, and the History,  
But keepe the song still in their memory:  
Such an opinion (in due measure) made  
Me this great Office boldly to invade:  
Nor could incomprehensibleness deterre  
Mee, from thus trying to emprison her,  
Which when I saw that a strict grave could doe,  
I saw not why verse might not do so too.  
Verse hath a middle nature: heaven keepes Soules,  
The Grave keepes bodies, Verse the Fame enroules.

(ll. 461-474)

この詩は、この世での生に苦しみ、Catholicism と Anglicanism との間で苦悶し続けた Donne が自分の生きるべき方向を見出した詩だともいえる<sup>15)</sup>。しかし、この詩は、やはり「世界の解剖」がテーマなのである。この詩の大部分はそれに費やされ、その様がよくどいくらいに歌われるのだから。

世界の解剖を進めれば、'She' への喪失感が深まり、世界の腐敗の姿への沈鬱さが増す。

Shee, shee is dead; Shee's dead;

幾度となく、この沈鬱な詩行が繰り返され、そのたびに

Thou knowest how poore a trifling thing man is  
(l. 184)

Thou knowst how lame a cripple this world is.  
(l. 238)

Thou knowst how ugly a monster this world is.  
(l. 326)

Thou knowst how wan a Ghost this our world is.  
(l. 370)

Thou knowst how drie a Cinder this world is.  
(l. 428)

と、世界への悲しい認識が深まる。そしてまた、そのたびに

And learn'st thus much by our Anatomie,

を繰り返し、確認するように歌う。

The heart being perish'd, no part can be free;  
(l. 186)

That this worlds generall sicknesse doth not lie

In any humour, or one certaine part;

(ll. 240-241)

That here is nothing to enamour thee:

(l. 328)

That it should more affright, then pleasure thee

(l. 372)

That 'tis in vaine to dew, or mollifie  
It with thy tears, or sweat, or blood: nothing  
Is worth our travaile, grieffe, or perishing,  
But those rich joyes, which did possesse her heart,  
Of which she's now partaker, and a part.

(ll. 430-434)

彼女は逝ってしまった，人間の卑小さ，世界の醜悪さが解った，と何度も何度も繰り返し，揺れるように行つては戻りながら世界の解剖は進む。そのことばは悲嘆から暗澹たる思いへと陥っていく。それはまるで同心円を描き続けて Donne 自身の宇宙の図を描いているようである。1つの円を描いては人間の弱さ，卑小さを思う。また1つの円を描いては中世の崩壊を知り，さらに1つの円を描くうちに近代といわれる時代への懐疑を抱く。時代がどう流れようと代わらぬ人間の愚かさとその存在の虚しさを知る。神の意志によって創られたはずの人間存在そのものに懐疑を抱く。Donne の描く同心円も proportion を失い，歪んでいるようである。*The first Anniversary* は歪んだ円を積み重ねた，いわば螺旋曲線の世界である。このようにマニエリスティックな様式で描かれた *The first Anniversary* は中世とルネサンス（近代）という連続した世界での絶望と懐疑の行き着く先であったのではないだろうか。

#### 註

- 1) H. J. C. Grierson, *The Poems of John Donne* (Vol. 1), p. 244
- 2) rent — A tribute, tax, or similar charge, levied by or paid to a person. The return of payment made by a tenant to the owner or landlord, at certain specified or customary times, for the use of lands or houses; (*OED*)
- 3) Evelyn Simpson (chosen), *John Donne, Selected Prose*, p. 142
- 4) G. A. Stringer (ed. ), *A Variorum Edition of the Poetry of John Donne* (Vol. 6), pp. 239-240
- 5) G. A. Stringer, *Op. Cit.*, pp. 240-242
- 6) G. A. Stringer, *Op. Cit.*, pp. 243-245

Donne の First & Second Anniversaries 論 ( I )

- 7) G. A. Stringer, *Op. Cit.*, pp. 241-242 C. Y. Lang(ed. ), *The Swinburne Letters*  
8) G. A. Stringer, *Op. Cit.*, p. 242 C. B. Furst, *The life and poetry of Dr. Donne, Dean of St. Paul's*  
9) G. A. Stringer, *Op. Cit.*, p. 256  
10) G. A. Stringer, *Op. Cit.*, p. 386  
11) virtue — The power or operative influence inherent in a supernatural or devine being, now arch. or obs. (*OED*)  
12) たとえば, *Songs and Sonets* などにはこの Donne の思想が窺える。

'The good-morrow' ll. 15-18

My face in thine eye, thine in mine appeares,  
And true plaine hearts doe in the faces rest,  
Where can we finde two better hemispheares  
Without sharpe North, without declining West?

'The Sun Rising' ll. 25-26, 30

Thou sunne art halfe as happy'as wee,  
In that the world's contracted thus;

. . .

This bed thy center is, these walls thy spheare.

- 13) 本論 pp. 14-15 参照

Donne その説教集の中でつぎのように述べ, この世での人の生きるべき途のことを 'rent' と言っている。ここでも, この世が腐敗の極みになればこそ, 人は神の意志に添っていき, 'rent' を払わなければならないとも言っているのであろう。

Sermon No. 3 (24. Mart. 1616)

"To conclude all, and to go the right way from things which we *see* to things which we *see not*, by consideration of the *King*, to the contemplation of *God*; since God hath made us his *Tenants* of this World, we are bound, not only to pay our *Rents*, (*spiritual* duties and services towards him,) but we are bound to *reparations* too, to contribute our help to society, and such external duties as belong to the maintenance of this world, in which Almighty God hath chosen to be glorified. If we have these two, *Pureness of heart*, and *Grace of lips*, then we do these two; we pay our *Rent* and we keep the world in *reparation* ; "

(Potter, G. R. & Simpson, E. M., *The Sermons of John Donne* (Vol. 1) p. 222)

- 14) 'A nocturnall upon S. Lucies day, being the shortest day.' (ll. 1-9, 28-29, 37, 43-45)

This the yeares midnight, and it is the dayes,  
*Lucies*, who scarce seaven houres herself unmaskes,  
The Sunne is spent, and now his flasks  
Send forth light squibs, no constant rayes;  
The worlds whole sap is sunke:  
The generall balme th'hydroptique earth hath drunk,  
Whither, as to the beds-feet, life is shrunke,  
Dead and enterr'd; yet all these seeme to laugh,  
Compar'd with mee, who am their Epitaph.

. . .

But I am by her death, (which word wrongs her)

Of the first nothing, the Elixer grown;

. . .

But I am None; nor will my Sunne renew.

. . .

Let mee prepare towards her, and let mee call  
This houre her Vigill, and her Eve, since this  
Both the yeares, and the dayes deep midnight is.

Richard E. Hughes, *The Progress of the Soule*, p. 209

“…… these lines are not primarily directed to Elizabeth Drury or her father, but refer to the feast of St. Lucy, who, like Elizabeth, was scarcely fifteen years old dead before a projected marriage, dying on December 13. The anniversary is, subordinately, Elizabeth’s, more importantly St. Lucy’s and most importantly it became Donne’s own.”

15) 川崎寿彦, 『ダンの世界』, pp. 196-204

このことが *The Second Anniversary* でのテーマになっていると言っている。

#### テキスト

Grierson, Herbert J. C. (ed.), *The Poems of John Donne* (Vols. 1&2) (*OET*), Oxford: OUP, 1912

Donne の詩の引用はすべてこのテキストによる。

Craik, T. W. & R. J. (ed.), *John Donne, Selected Poetry and Prose* (*Methuen-English-Text*), London: Methuen, 1986

Grierson, H. J. C. (ed.), *Donne, Poetical works* (*OSA*), Oxford: OUP, 1933

Smith, A. J. (ed.), *John Donne, The Complete English Poems* (*Penguin English Poets*), London: Allen Lane, 1974

Stringer, Gary A. (ed.), *The Variorum Edition of the Poetry of John Donne* (Vol. 6), Bloomington and Indianapolis: Indiana Univ. Pr., 1995

Manley F. (ed.), *John Donne: The Anniversaries*, Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1963

Milgate, W., *The Epithalamions, Anniversaries and Epicedes of John Donne*, Oxford: OUP, 1978

Potter, G. R. & Simpson, E. M. (ed.), *The Sermons of John Donne* (10 Vols.), Berkeley: Univ. of California Press, 1953

Simpson, E. M. (chosen), Gardner, H. & Healy T. (ed.), *John Donne, Selected Prose*, Oxford: OUP, 1967

#### 参考文献

Cary, J., *John Donne, Life, Mind, & Art*, London: Faber and Faber, 1981

Bald, R. C., *John Donne, A Life*, Oxford: OUP, 1970

Walton, Izaak, *The Lives of John Donne, Sir Henry Wotton, Richard Hooker, George Herbert and Robert Sanderson* (*The World's Classics*), London: OUP, 1936 (初版 1670)

Lewalski, B. K., *Donne's Anniversaries and the Poetry of Praise*, Princeton Univ. Press, 1973

Hughes, Richard E., *The Progress of the Soul: The Interior Career of John Donne*, New York: William Morrow, 1968

Sypher, Wylie, *Four Stages of Renaissance Style*, New York: Doubleday & Company, 1955

川崎寿彦, 『ダンの世界』, 東京: 研究社出版, 1967

ホッケ, グスタフ・ルネ, 種村季弘 (訳), 『文学におけるマニエリスム I, II』, 東京: 現代思潮社, 1977



Donne の First & Second Anniversaries 論 ( I )

(1995 年 8 月 16 日受理)

(おかむら まきこ 女子短期大学部教授)